

研究区分	教員特別研究推進 教育推進
------	---------------

研究テーマ	コロナ禍において、学生が抱える困難とその対処について： 困難状況下における学生のレジリエンスの育成				
研究組織	代表者	所属・職名	国際関係学部・教授	氏名	津富 宏
	研究分担者	所属・職名	短期大学部・准教授	氏名	中澤 秀一
		所属・職名	経営情報学部・講師	氏名	木村 綾
		所属・職名		氏名	
	発表者	所属・職名	国際関係学部・教授	氏名	津富 宏

講演題目	コロナ禍の学生支援を通じて見えてきたもの
------	----------------------

研究の目的、成果及び今後の展望

目的 新型コロナウイルス感染症に起因する、経済、健康、社交、家族関係などの諸側面の困難について、学生たちが乗り越えているかについて、学生のレジリエンスというポジティブな側面から探求することと目的とする。

成果
コロナ禍においては、学生たちがさまざまなかたちでレジリエンスを発揮していることが明らかとなった。

1 LINE コミュニティたよりジョーズたよられジョーズの発足と運営
スペインの時間銀行に着想を得た「時間の貸し借り」による助け合いシステムとして、県立大学生が発足させたが「たよりジョーズたよられジョーズ」である。オンラインコミュニティである LINE グループの特性を生かして、非接触のままの助け合いの仕組みを発達させた。特に、友達づくりに困難があった現2年生にとって重要な機能を果たし、発足して3年目になるが、さらに活発に活動している。

2 学生ボランティアセンターによる「たべものカフェ」の運営
令和2年7月に始まり、令和4年3月の時点で55回を数える「たべものカフェ」は、食料品の配布と学生の暮らしについてのヒアリングを合わせた活動である。本学公認委員会の学生ボランティアセンターが運営を初回から絶えることなく運営を担ってきた。その主たる理由には、ヒアリングを通じて、学生たちが、他の学生たちの困難に共感しこの場を支えなければという決意を抱いたことである。学生たちの困難が、コロナ前からのものであり、大学側の要因もあることも明らかになってきた。

3 学生助けたいんじゅーの活動
学生ボランティアセンターの学生とその他有志の学生が集まり、学生の困窮状況を改善するために活動を始めたのが「学生助けたいんじゅー」である。学生の困窮状況の聞き取り、発信、政策提案などのアドボカシー活動を行っている。

今後の展望
コロナ禍の学生支援を通じて見えてきたことは、この間に発揮された学生たちのレジリエンスに基づく活動は、いずれもコロナ後にとって重要であるということである。これらの活動の改善を通じて、大学生生活のウェルビーイングの向上に寄与したい。